徳川家康、三度死す

第三回

講談師　一龍斎貞花

大河ドラマ「どうする家康」の家康は、自分の意思がなく頼りないところが、どうするというタイトルに合っているだろうが、後年の家康とはイメージが違いすぎるという声を聞く。されば家来がしっかりして身代わりを立ててもおかしくないでしょ。そこが私の着眼点の一つです。

天正13年6月26日から背中に出来た腫瘍が悪化して重態におちいってしまった。

智恵者本多正信の出番です。又もや身代わりを考え、側近以外に知られないようにするにはどうしたらよいか。そこで影武者3号を家康の病室の隣室にこっそり寝かせ、2号が死ねばひそかに処理し、3号を全快したと起き上らせ、「全快なされた」と公表することを考えます。

幸い、医師たちの治療で完治。20日間も苦しんだので、

「よいか、家康公はお医師家康といわれる程、自ら薬研を使い薬を調合された。その方も薬草の研究を致せ」

「エッ、薬草ですか。トップで威張っていられると思ったら薬草の研究までしなければならんとは有難くない」

と、身代わり教育に愚痴をこぼすほど。

天正18年7月、豊臣秀吉は難攻不落といわれた小田原城を包囲、流石の北条も降参。

「徳川殿、参られよ」

小田原城を見下ろす石垣山の頂へ。この時、秀吉と家康は並んで小田原城へ向かって放尿。これが〝関東の連れション〟のいわれ。

「徳川殿、貴殿には関東八か国を進上しよう。250万石じゃ」

「ハッ、忝じけのうございます」

秀吉にやりとして

「但し貴殿の領地、駿河、遠江、三河、甲州はわしが貰う」

太田道灌亡き後、関東の主となった北条早雲は、小田原城を本城としたため、江戸城はほったらかし、壁ははがれ雨漏りする有様。江戸城へ入った家康はじめ重臣たち唖然とした。

江戸の町作り

城から眺める目の前は、葦が生い茂り漁師の家が点在しているだけ。

「今まで500万石あった領地から、半分の関東へ国替え、おまけにこのような田舎を与えられるとは・・・」

重臣たちが思わず嘆息するや、正信が、

「いやいや、なんとも良き土地ではござらんか」

「ナニッ、なんと申される」

「目の前の波穏やかな江戸湾は最高の港、関八州は広大な平野があり開墾すれば豊かな国になりますぞ。大坂から目の届かぬ土地とあって遠慮なく城造りが出来るではござらんか」

流石は智略家の正信、目のつけどころ、考え方が違います。

「某が先頭に立って町作りを致しましょう」

井の頭から水を引いた神田上水、大久保主水（もんと）が責任者だが、実際に正信捻鉢巻きで先頭に立って鍬を振るうので、家来たちも刀の代わりに鋤、鍬を握って町作り。

秀吉の存命中は、秀吉配下の大名が家康の行動を見張っているので、大々的な江戸城改築は我慢していたが、秀吉が亡くなるやただちに城造りに取りかかり、江戸は正信の言葉通り城下町を形成していったのでございます。

いよいよ大坂の陣

秀吉が亡くなり、続いて前田利家も亡くなるやバランスが崩れ、家康は大きな力を有し、五大老筆頭、秀頼の後見職という立場の家康が、上杉景勝に対し、

「秀頼殿にご挨拶に大坂へ下向せよ」

と通達するも上杉腰を上げません。上杉叛逆と決めつけ

「上杉討伐じゃ！」

出陣すれば、石田三成と景勝が呼応して、はさみ討ちにしようと旗を立てるに違いないとの家康の読み通り。

三成挙兵の報せに小山（おやま）会議。

三成憎しから、福島正則一番に家康に味方を宣言。

豊臣恩顧の諸将も賛同。意思表示が遅れた掛川城主山内一豊が、

「我が城を差し上げます。ご随意にお使い下され」

これはM＆Aです。かつては大が小をのみ込んだが、今は子会社の方が経営内容がいい会社が少なくありませんが、ここは、

「私の会社を差し上げます。その代り我が社を存続させて下さい」

というわけ。

家康これによって勝利を確信、だからこそ後に一豊に土佐の国24万石を与えています。

東海道を進んだ東軍の先鋒は、正則の居城尾張の清州城へ。

対する三成は大垣へ入城。

この間家康は動かず江戸城に於いて合戦前から50日間に、

「味方して下され」

と、155通の手紙を82大名に。

黒田長政に9通、伊達政宗に8通、福島正則と池田輝政に各6通、藤堂高虎に5通、最上義光（よしあき）に4通。

長政に一番多い9通というのは、豊臣恩顧の大名を味方につける工作の窓口となっていたので、連絡を取り合うためにやり取りしたもの。長政が、福島を味方に引き入れた大働き。

冷たいといわれる官僚タイプの三成とは大違い。

今ならメールの方が手軽、イエイエ心の通うのは手書きの手紙です。本物の家康の書体を会得した手紙です。

なかなか腰を上げない家康に、正則いらいらしていたが、

慶長5年9月1日、3万2千を率いて家康江戸城を出発、箱根を越えて西へ。

後継者秀忠率いる3万8千の軍勢は東山道から信濃へ。

初陣の秀忠は行きがけの駄賃と、真田昌幸、幸村親子の上田城を落とさんとしたが、老獪な昌幸の戦法に大苦戦。父弟と別れ徳川方についた真田信幸が、

「恐れながら上田にこだわるは上策ならず、上田に掛かり合っていては、父昌幸の術中に陥るばかりです」

「信幸殿の申される通り、関ヶ原に遅れるようなことになればそれこそ大失態、打ち捨てて参りましょう」

本多正信が賛成。

9月15日、関ヶ原合戦の火ぶたが切って落とされました。

西軍8万2千に対し、東軍8万9千。

これに秀忠の3万8千が加われば、東軍が圧倒的有利になるのだが、秀忠軍結局間に合わず、戦いは一進一退を続けておりましたが小早川秀秋を裏切らせて大戦（おおいくさ）はわずか一日で東軍の勝利。家康は、遅れた秀忠に怒り心頭対面を許しません。

後継者のポストを剥奪されても仕方のないほどの失態だが家康は我慢。

優秀な長男信康は切腹させ、次男秀康は槍の達人なれど結城家へ養子に行っている。他家へ養子に行った者を呼び戻し後継者にしてはいかんという考えから、怒ったものの廃嫡しません。真田昌幸、信幸、幸村の親子三人、父と弟が関西、兄が関東と敵味方に別れたがどちらかが勝って家名を残るようにしたと考えられます。

関ヶ原の戦いが徳川方の勝利となるや徹底抗戦の真田父子を殺そうとしたが、兄信幸の懇願により幸村は和歌山の九度山（やま）に流され命永らえるや、その後風雲急を告げると秀頼の依頼により再び大坂方へ。幸村の獅子奮迅により家康三度目の死を迎えるというお話しは次回連続に申し上げます。